参加体験型学習の学びのプロセスとワークショップ
－湘南工科大学の実習科目「社会貢献活動」の事例より－

○東　宏乃（湘南工科大学）
市山　雅美（湘南工科大学）

１．実習科目「社会貢献活動１，２」

湘南工科大学では、サービスラーニングの一環として、学生が、地域の市民団体や NPO、財団などが主催する社会貢献活動に、実習生として参加し活動する科目を設けている。主に、３年生が履修し、５０時間以上の学外での実習と学内での研修を行うと２単位が認定される。「社会貢献活動１」は実習先が用意している活動を選ぶ選択型、「社会貢献活動２」は、「１」を終えた実習生がさらに先に進むプログラムで、実習先に活動内容を提案していく提案型である。

実習テーマは約４０種類、「教育」、「自然・環境」、「福祉」、「社会」、「工学的取組」、「ユニバーサルスポーツ」などの分野があり、実習生は自分が興味をもったテーマを自由に選ぶことができる。５０時間以上という実習時間は、例えば、ある福祉施設の場合、１日活動すると７時間の実習になるので８日活動すれば終わる。また、ある川のクリーンアップの場合、毎月第４土曜日の午前に２．５時間の実習になるので、単純計算では５０時間には２０回、約２年かかって終わる。このように実習を終えるまでの期間には大きな幅がある。

現在、本学ではこの実習科目の教育効果調査を行っている最中であるが、ここでは、個々の実習生にとって参加体験型の実習がどのような意味があるのか、事例分析をしていきたい。

特に、中間期研修会を、講義型ではなく、実習生同士が参加者となりその相互作用の中でふりかえりをするワークショップ（以下、ＷＳ）という手法をとっているが、これが実習生の学びに与える影響について言及していく。

２．「社会貢献活動１」の中間期研修ワークショップ

５０時間以上の実習の中で、中間期（１５時間以上４０時間未満）の時期に、実習生は中間期研修ＷＳを受けることを義務づけられている。上述したように、実習の進度は実習テーマや実習生の都合によりまちまちなので、中間期研修ＷＳは年に４回（６月、８月、１１月、２月）開催し、２００８年度後期～２００９年度後期までに１６０名の実習生が参加した。中間期研修ＷＳのテーマは、２００９年度は「大学での学びと社会貢献活動のつながり」であった。

約２時間のＷＳの前半では、異なる実習テーマで活動した実習生がお互いの体験をインタビューし合い、相手に成り代わって紹介をする「他己紹介」というアクティビティを使って聴き合い、実習体験を共有する。ＷＳの後半は、ふりかえりの中で、実習の後半の目標について考え、各自が一言発表をするというものである。

ＷＳの感想には次のようなものがある。「自分の行っている実習だけでなく、他の所に行っている人と一緒に話をする機会が貴重だと思ったし、こういうこと（ＷＳでの意見交換）ができるのも社会貢献の良さだと思いました。」など、他の実習テーマの実習生と意見交換をする事に意義があると感じる者が２割強、「異なる実習テーマの活動を知ることができてよかった」「みんながどのような実習をやっているのか知ることができて為になった」など、他の実習テーマの活動を知る良さを言う者が２割弱である。また、「実習テーマや分野が異なっても、皆、考えていること感じていることが似通っていることがわかって安心した」、「（ＷＳが）始まる前に感じていた不安が、始まってみたら楽しくなり、消えていった。いろいろな実習テーマの人達と話ができて、いろいろな視点から実習を見ることができ、良かった。」「いろいろな人との関わりの中で思いもかけない事態に遭遇したり、いろんな具体的なエピソードか聞けておもしろかった。みな、漠然と活動するのではなく、ちゃんと考えながらやっているんだということが、とても伝わってきました。」など、他の実習テーマの活動を知ることで自分が感じたことを述べる者が約３割弱いる。

総じて、体験を共有することの良さを訴える実習生が多いといえる。

このように、実習の中間期において、自分以外の誰か他の実習生の体験を聴くことは、自分自身の体験をみつめる良い機会にもなると考えられる。

３．「学びのプロセス」と「他者性」－ある実習生ＯＳ君へのインタビューをもとに

４０近い実習テーマの中で、学生が主体になって活動している実習「車椅子ケアネット」を終えたＯＳ君（機械工学科、Ｍ１）にインタビューを行った。ＯＳ君は、３年生の時、「社会貢献活動１」で、福祉施設の利用者を大学の見学に招く「大学訪問受け入れ」と、「テコの原理」の授業を出前する「小学校の理科授業のサポート」を実習した。４年生になってから、「社会貢献活動２」で、「車椅子ケアネット」に進んだ。この実習は、施設で修理が必要になった車椅子の点検整備をしたり、施設で不要になった車椅子を修理して地域で必要としている個人に寄贈したりするリサイクル活動である。その関連で、小学校の「総合的学習の時間」のゲスト講師を引き受け、小学生を対象に、車椅子試乗体験と車椅子の分解清掃を体験させることも行った。

ＯＳ君は、どちらかといえば企画・提案が大好きな学生だが、「最初は周りがあまり見えなかった」というのが担当教員の評価だった。ところが、実習を重ねていくうちに、責任感が増し、周囲（「他者」）に気を配ることのできる実習生へと育っていったのである。

インタビュー１：「(2008 年４月に）社会貢献活動を始めて、真っ先に思ったのは企画のおもしろさです。最初に始めた実習が『大学訪問受け入れ』で、いろんな人に協力してもらって、そういう人たち同士の間を自分がつなぐということに、すごくやり甲斐を覚えました。今まで意識しなかったけれど、つなぐ力というものをすごく意識するようになって、それを他のフィールドでも使えないかなと、考えた時、電気科のＹ君に誘われて、『理科授業のサポート』の実習に進みました。」2008 年７月の中間期研修ＷＳのふりかえりでは、社会貢献活動に必要なこととして一番にコミュニケーション力を挙げ、「コミュニケーション力は、あらゆる活動でニーズの把握に有効な情報を得るために最も大切と思われる。一方、工学技術は活動するうちに後からついてくるために必要性が高くないと考えた。」と、「他者」を意識したコミュニケーションの重要性に目覚めたコメントをしている。2009 年１月の「社会貢献活動１」の「報告書」では、より多くの人同士のふれあいができたことを挙げ、自己肯定感を高めており、加えて、自分の意気込みよりは「相手に合わせる」ことの大事さや、他者への「思いやり」にも言及している。

インタビュー２：「(社会貢献活動２の『車椅子ケアネット』で１年間活動してみて）思ったのは、自分の視点と相手の視点の違いですね、やっぱり。自分の視点、立場と相手の立場をきちんととらえて、位置関係をはっきりさせて、その上で、企画をどうしていくかということを考えられるようになったかな、と思っています。」と、自分と他者、他者と他者を関係づけることにも意識を働かせている。「社会貢献活動２」の「報告書」(2010 年１月）では、小学校への出前授業の体験から、現場で他者と関わりながら臨機応変に対応きるようになり、「他者」との関わりを積極的に受け入れるようになっていったことを報告してくれている。

ＯＳ君の学びのプロセスを見る限り、中間期研修ワークショップがきっかけになり、他者へのまなざしが意識化されていった。他の実習生にもインタビューを試みているが、中間期研修ワークショップと学びのプロセスとの関係を、より一層明らかにしていきたい。（本研究は平成 20 年度採択、教育ＧＰ「社会と工学をつなぐ技術活用力の育成」の一環である。）